魔女狩りと *Macbeth*

大　上　治　子

序

ヨーロッパでは1580年から1660年にかけて魔女狩りが猖獗を極めた。近代の夜明けと言われるこの時期を中心に，何十万人もの女性が魔女というレッテルを貼られて処刑されていった。この現象はヨーロッパ特有のものであるとして研究がさかんに行われている。

今まで西欧文明が自己形成をする過程を，植民地の原住民との関わり，ユダヤ人やムーア人の異人との関わりで見てきたが，これらの原型が魔女狩りであり，自己の社会の内部で大規模に行われた。それは異端への迫害から始まったが，それまで共存してきた母権的な土着宗教に基づく呪術を徹底的に排除することを目指した。そのことによって父権的キリスト教に基づく家父長制の絶対主義を確立し，都会中心の資本主義経済や理性重視の科学技術が発展する基盤を固めることができたのである。原住民との関わりが *The Tempest*，ユダヤ人とムーア人との関わりが *The Merchant of Venice* と *Othello* によく示されているように，魔女狩りの本質は *Macbeth* に示されている。

Macbeth は1606年，悪魔学者でもあり，魔女狩りに熱心であったと言われるスコットランド出身のジェームズ一世がデンマーク王を歓迎する行事の席で上演された。この頃，魔女を中心とするドラマが次々上演されている。1605年オックスフォードの国王歓待の演し物として，3人の魔女がスコットランド，イングランド，アイルランドの三王国の王の称号でジェームズの呼びかける寸劇が上演された。シェイクスピアがそれを見て，その出所であるホリンシェッドの年代記をひもといて *Macbeth* を書いた，とされている。魔女の絡んだスチュワート王家創設神話で，しかも国王殺戮がいかに重大な罪かを国民に教える，新国王を迎えるのにふさわしい演目であった。

本稿ではこの作品を魔女狩りの歴史の中に置いて，神話や民話的要素の濃い「古い魔女」としての三人の魔女とヘカテ，悪魔学で定義され，魔女狩りの対象となった「新しい魔女」としてのマクベス夫妻，「時の権力者」としてのマルコムたちについて考察したい。

I　*Macbeth* と魔女

A　古い魔女

Macbeth に登場する三人の魔女とヘカテは，当時の悪魔学で定義されていた悪行をする魔女の性格もある程度備えている。しかし，超自然的存在であり，その自在さ，運命の操り方，その特性，パワーから見て，古くからの異教の神話，民話の集合無意識を体現していると言える。

まず，彼女たちの特性として〈両義性〉が挙げられる。男でもあり女でもあり，fair であり foul である。境界に住み，自在に飛んで現れたり消えたりし，二分法をすり抜けてヤーヌスのごとき二面性を備えている。人間社会では，神のごときダンカン，マルコム，理性的バンクォー，忠臣マクダフという fair な人々と，悪魔となる foul なマクベス夫妻と分けられるが，魔女達はどちらに味方するともなくすり抜けていく。

異教の大地母神は人間にとって積極的な面と消極的な面，明と暗，生命の授与と破滅というアンビバレントな面を持っていた。ディアナ＝デーメーテル神は大地の豊饒の権化，田畑の収穫の守護神であるが，同時に収穫物を絶滅する力を持っていた。ヘカテは三面三体の姿の女神であり，本来，戦争・評議・競技・馬術・農耕などを司るとされた。やがて冥界，夜など陰暗

なものと関連づけられ，亡霊や魔術を支配すると信じられ，地獄の犬を連れて三叉路に現れるようになった。天界にいるときはルナ，シンシア，フォエベと呼ばれる月の女神，地上にいるときは森の狩人の乙女ダイアナ，タイターニアとなり，冥界では魔女神ヘカテに変身すると信じられていた[1]。*A Midsummer-night's Dream* を支配する月の女神ディアナ＝タイターニアが，*Macbeth* では魔女神として地獄の世界を支配しているのである。ヘカテの見せる幻は 'Upon the corner of the Moon/There hangs a vap'rous drop profound/I'll catch it ere it come to ground;/And that, distil'd by magic sleights,/As, by the strength of their illusion,/Shall draw him on to his confusion' (3-5, 23-29)[2] というように月の魔力によって作られる。

次に〈飛ぶ〉という特性に関しては，古いゲルマンの亡霊信仰から来ている。嵐の夜に死霊の群が荒々しい狩りをする伝承である。もともとは樹木のデーモンで，アルテミス，ディアナ，ヘカテ崇拝にも共通するものであり，彼女たちは狩猟の神でもあり，荒々しい動物を従えていた。ヘカテは精霊を率いる神で，死者崇拝と祖先崇拝につながる。また，南欧の魔女のストリガも夜を徘徊する女の亡霊で，フクロウの形をした貪欲な吸血鳥である。また，飛ぶイメージはシャーマンで，おのれの肉体を離れ，杖にまたがって忘我状態で精神飛行するとも言われている。北欧系の魔女は hagazussa (hag：垣根＋zussa 女性) と呼ばれ，「垣根・柵の上を飛ぶ女」というイメージが強い。垣根は村共同体と野生の境界をなし，村と野生の双方に身を置く半デーモン的存在である。デーモンは正常の秩序の内側と外側を往復する存在で，子供を殺すことも病を癒やすこともできる異形の存在であった[3]。

そして〈3人〉という magic number で現れ，呪文を掛け，円環を作って完結する。'The Weird Sisters, hand in hand,/.../Thrice to thine, and thrice to mine,/And thrice again, to make up nine./Peace! The charm's wound up.' (1-3, 32-37) 3幕5場ではヘカテがやきもちをやくほどうまく 'riddles and affairs of death' (3-5, 6) をかける。運命の女神は3人であることが多い。ギリシャ神話では3姉妹で，末の妹クロトが生命の糸を紡ぎ，ラケンスが糸の長さを決め，年長のアトロポスがはさみで切り取る。スカンジナビアの伝説では，ウルダ，ヴェルダンディ，スクルダという3姉妹がそれぞれ過去，現在，未来の運命を支配する。彼女たちはこのような北欧・南欧に共通する異教の女神の系譜にある。唯一神が終末に向かって直線的に運命を定めるキリスト教的運命とは全く異質な存在である。そしてマクベスの未来を予言するが，マクベスは 'That is a step,/On which I must fall down, or else o'er leap' (1-5, 49-50) と，定められた直線の運命を自ら越えようとして虚無の地獄に堕ちて行くのである。'...and to-morrow and to-morrow,/Creeps in this petty pace from day to day/To the last syllable of recorded time./And all our yesterdays have lighted fools/The way to dusty death.../Sygnifying nothing.' (5-5, 19-28)

そのほかの属性は，悪魔学者が民間伝承を踏まえて悪行とした新しい魔女のものである。

〈天候〉　彼女たちは雷鳴・稲妻とともに登場し，秩序の崩壊や混沌の予兆とし，'filthy air' を飛んでいく。霧は実体を隠し，理性を失わせて誤った想像力を導き，幻を見させる。栗をくれなかった船乗りの女房への復讐に，逆さ風を呼んで船を立ち往生させて干上がらせ，眠りも訪れず 'He shall live a man forbid' (1-3, 21) となる。黒魔術は下位の自然に働きかけて風や嵐を引き起こすとされていた。1590-1年の North Berwick Witches の魔女裁判では wise woman として評判の良かったアグネス・サンプソンが拷問にかけられて，ジェームズ王が妃となる人を連れてくるためにデンマークに旅したとき，嵐を起こして王を溺れさせようとした，と白状して処刑されている。

〈動物〉　との関わり。魔女達は使い魔を用いて悪行を働き，動物に変身するとされた。使い魔として，Witch 2 は Graymalkin(お化け猫)，Witch 3 は Paddock（ひきがえる）を持つ。後

に the brindled cat（虎猫）と呼ばれ，hedge-pig（はりねずみ）や harpier（ハーピー）も登場する。ドイツの伝説では魔女は猫に変身するとされている。猫は愛の女神フレイアに仕える動物であった。猫はエジプトの神々の持ち物であり，また，イシスの使いで神聖な動物とされた。豊饒の太女神は穀物の精として猫の中に宿ることもあり，ディアナはテュポンを恐れて猫の姿に変えて，オリュンポスからエジプトへ避難したといわれている[4]。ひきがえるはその醜悪さと，皮膚に刺激や損傷を受けると白い濃い毒が分泌され，幻覚誘発性を持つことから，古代から邪悪な地獄の存在，悪魔の生き物とされた。ハーピーはギリシャ神話の上半身女，下半身鳥の貪欲な怪鳥である[5]。

〈殺し，カニバリズム〉が最も恐れられ，重い罪とされた。赤ん坊を殺して地獄の大釜で煮て食べる。家畜殺しについては 'Killing swine' (1-3, 2) とあるが，豚の病死は魔女の仕業とされた。4 幕 1 場の魔女の宴会の cauldron で煮る地獄の雑炊はいろいろなものが入っていてゴージャスである。'poison'd entrails, toad. . . , fillet of a fenny snake, eye of newt, toe of frog, wool of bat, tongue of dog, adder's fork, blind-worm's sting, lizard's leg, howlet's wing, scale of dragon, tooth of wolf, witch's mummy, . . . liver of blaspheming Jew, gall of goat, slips of yew, sliver'd in the moo's eclipse, nose of Turk, and Tartar's lips, finger of birth-strangled babe ditch-deliver'd by a drab' 不吉な動物，異人，赤ん坊の一部などのごった煮で，恐ろしくもユーモラスである。そこに 'a baboon's blood' や 'sow's blood grease that's sweaten/From the murderer's gibbet' を入れ，血と殺人のイメージを濃厚にして 3 aparritions を出現させる。その幻影は 'an Armed Head', 'a Bloody Child', 'a Child Crowned, with a tree in his hand' の姿をとり，やはり赤ん坊と殺人のイメージである。

B　新しい魔女：マクベス夫妻

古い魔女達が境界で暮らし，両義的で自由であり，円環的時間 を生きているのに対し，人間達は国の中心で権力争いに明け暮れ，男らしくあることにこだわり，直線的時間に生きている[6]。何よりも，彼らは二分化され，二極に分解していく。一方に，想像力，妄想，狂気，弱さ，病気，非自然，非正統性，悪魔，闇，反逆，女。もう一方に，理性，自然，強さ，健康，治癒力，正統性，神，光，秩序，男。このドラマは前者が後者に対して反乱を挑み，結局，後者によって抑えられ滅びるという物語である。そしてその反乱が自らの意志で魔女（悪魔）を呼び出し（悪霊召喚），自らの魂を売り渡して行われる，というところが新しい魔女の特徴となっている。

〈想像力・妄想・狂気・病・不自然・悪魔〉　マクベスはバンクォーと登場して魔女の予言を聞く。それに対し，バンクォーは 'have we eaten on the insane root/That takes the reason prisoner?' (1-3, 84-85) と言う。バンクォーがそのまま理性を保つのに対し，マクベスは気違い根っこを食らい，夢と妄想と狂気の想像力の世界に入り込む。'Present fears/Are less than horrible imaginings.' (1-3, 137-8) そして，幻の短剣に導かれてダンカン王を殺す。殺した後は 'Sleep no more' (2-2, 34) と屋敷中に叫ぶ声を聞き，手から血を洗い流すのに 'Will all great Neptune's ocean wash this blood/Clean from my hand? No, this my hand will rather/The multitudinous seas incarnadine/Making the green one red' (2-2, 59-62) と，聴覚的にも視覚的にも狂気に近い想像によって脅える。そのような夫に対して，夫人は「男らしくあれ」，と叱咤激励し，そのように考えては気が狂ってしまいますと諌める。妄想は弱い女性に宿るものなのである。後にマクベスは自らの守り神をアントニーに，バンクォーの守り神をシーザーに喩えるが，自らの女性的資質が現実の女性の介入によって破滅の原因になるのである。しかし，私たちはそこにむしろ良心のうずきと，イメージの豊かな力を見てとり，そこにこそ心の真実があると思う。

ダンカン王を殺して王位についたマクベスは，「国王を生み出す方」と予言されたバン

クォーに不安を持って一人閉じこもる。恐ろしい悪夢にさいなまれ，狂気の不安におののき，殺されて人生という痙攣する熱病の癒えた王を羨む。'I am cabin'd cribb'd, confin'd, bound in/To saucy doubts and fears' (3-4, 23-24) 正しい価値観を失うことで人々との絆も失い孤独に陥り，魔女のことばの奴隷となる。この時，心はサソリでいっぱいで，コウモリが飛び，魔女ヘカテの呼び出しに応じてカブトムシが音を響かせる夜に呼びかけ，カラスに言及し，'night's black agents to their preys do rouse' (3-3, 53) と述べて夫人を驚かせている。言及される生き物はすべて不吉で闇と死を連想させる使い魔たちである。この時点でマクベスはいわば自立した一人前の魔女になっている。自ら，使い魔たちと夜に呼びかけているのである。そしてバンクォーを殺させた後，宴会の席で彼の亡霊を見る。'the very painting of your fear' (3-4, 60) と夫人が言うが，彼のみが見る妄想である。魔女となった彼はもはや人間の宴会には加わることができない。4幕1場で魔女達の宴会に参加するのである。

マクベスは魔女の洞窟に赴き，大自然が混乱してもかまわないから，予言の魔力を行使してくれるように頼む。そして3人の幻影と，未来の8人の王の行列を見ることになる。これは彼がはじめに気違い根っこを食べたように，魔女の大釜のごちそうを食べて幻を見るということである。釜に入ったものは幻覚作用を引き起こすものもあり，自ら悪霊を召喚したことを意味する。この後，'The very fistlings of my heart shall/The firstlings of my hand' (4-1, 146-7) と，恐怖を感じることもなく自動人形のごとく殺人を犯していく。黒い悪魔，悪魔の申し子といわれ，国は墓地となり，残るは虚無感のみ。マルコム軍に対しては予言だけを頼りに，運命とことん戦おうとする。この最後の様子は，実は劇の始まりで報告される勇将たるマクベスの姿と同じである。運命に挑み，戦の女神に愛され，血の海を渡り，屍の山を築いて味方に勝利をもたらす。そのような英雄のおかげで成り立っている国が，日常の秩序の中で彼を魔女にして葬り，魔女を葬った力によって神聖な正統性をアピールし，自らの基盤を固めるのである。

夫人は夫を悪行へ促すイヴとして登場する。'I may pour my spirits in thine ear (1-5, 26) 使い魔はカラスで，闇の地獄の悪魔に呼びかける。Come, you spirits/That tend on mortal thoughts, unsex me/And fill me, from the crown to the toe, top-full/Of direst cruelty... Come, thick night,/And pall thee in the dunnest smoke of hell' (1-5, 40-43, 50) 弱い女性という性を棄てて悪魔を入れ，男になろうとし，そのためには赤子も殺すという。'I would, while it was smiling in my face,/Have pluck'd my nipple from his boneless gums,/And dash'd the brains out,' (1-7, 56-58) 殺しの場には，フクロウとコウロギが使い魔のようにいる。しかし，王が父に似ているために自分で殺せなかったというように，魔女になりきれない。'A little water clears us of this deed' (2-2, 66) というようにマクベスに比べて想像力に欠けていた夫人は，後半では心を病み，'She is troubled wity thick-coming fancies/That keeps her from her rest' (5-3, 37-38) 夢遊病のなか自殺する。自らの性を否定して強くなり，夫を誘惑して堕落させて後は，やはり弱き性として妄想の虜となって自らの命を絶つ。彼女は精神と肉体において二重に自分を殺すのである。そしてイヴ同様，自分だけでなく男性を堕落させる故により罪深いのであるが，夢遊病のなか自殺する姿は哀れを催させる。

C　権力と魔女

マクベス夫妻とは反対に，理性・自然・治癒力・秩序・光を体現するのがダンカン，マルコム，バンクォー，マクダフであり，神の摂理としての〈自然〉が強調される。

自然の時間は苗木，種子で示され，雛鳥，赤子のイメージが強調される。ダンカンはマクベスを「自分で育てる木」に喩える。'I have begun to plant thee, and will labour/To make thee full growing' (1-4, 37-38) バンクォーは未来を種子に喩えて魔女に聞く。'say which

grain will grow and which will not' (1-3, 59) 美徳と憐れみは天使と赤子となる。'his virtue,/Will plead like angels, trumpet-tongu'd, against/The deep damnation of his taking-off ;/And pity, like a naked new-born babe,/Striding the blast...' (1-7, 18-22) マクダフは妻子を殺されて雛鳥と親に喩える。'all my pretty chickens and their dam/At one fell swoop?' (4-3, 218) しかし植物や動物は本来，円環的時間を生きるのではなかろうか。ここでは赤子は最後の審判でラッパを吹く黙示録的時間を表し，王が植えた苗のみ，選ばれた種子のみが育ち，それはずっと継承されていく，というように直線的時間を表している。

自然が神の摂理・秩序を表す great chain of being となっていることは，次の台詞からもわかる。''Tis unnatural, .../A falcon, tow'ring in her pride of place,/Was by a mousing owl hawk'd at and kill'd (2-4, 10-13) every one/According to the gift which bounteous nature/Hath in him closed ; whereby he does receive/Particular addition...' (3-1, 95-98)

不自然は混乱と病を生み，それを治すのは神の力を授かった王である。4 幕 3 場で述べられるイングランドで王の病と呼ばれるるいれきは，不思議な病で，膿ただれた病人を王が金貨を掛けて聖なる祈りをされるだけで治る。この奇蹟や予言の能力は神によって授かり，子孫に伝わる。マクベスと彼の統治する国はいわばるいれきにかかって膿ただれた身体であり，正統なる王の治癒力で奇蹟的に治るのである。逆に，王の奇蹟を示すために病を必要とすることもある。魔女にたぶらかされた悪魔のようなマクベスがいるからこそ正統な王の神々しさが際だつ。光は闇を必要とするのである。

しかし実際に種や苗を育み，雛鳥や赤子を生み育てるのは本来母親の役割である。病を癒やすのも古来 wise woman として植物に通じ，厨を預かってきた女性が担当してきたものであった。それが権力側の男性のみに属する特性であるとするのは不自然ではなかろうか。マクベスを殺すのが 'one of woman born' でなく，'from his mother's womb/Untimely ripp'd' (5-8, 15-16) 自分で母の腹を切り裂いて生まれたマクダフである，ということも，'the wood of Birnam rise' が，バーナムの森の木の枝を切り取って頭上にかざして進む，ということも森を育てるよりも破壊して人工的に利用する，いわば自然に反することである。もちろんここでは森や女性は悪魔の住む闇を意味しており，異教的自然とキリスト教的自然が全く相反する異質なものであることを示している[7]。ジェームズ一世は議会演説の中で自身を夫と頭に，ブリテン島を妻と体になぞらえ，著書の中で自身を貴族達に育む乳を与える父親になぞらえたそうである。母性が否定され，倒錯的に歪められている。

次に，異教の女神であった古い魔女がどのようにしてなぜ悪魔としての新しい魔女になったのか，歴史を通して考えてみたい[8]。

II　ヨーロッパの魔女狩り

A　古い魔女から新しい魔女へ

魔女はどの民族にも見いだされ，それぞれが交錯しているといわれている。北欧系では hagazussa（垣根の上を飛ぶ女）でドイツの hexen と共通している。古代イギリスでは wicca（賢い女）から witch となり，南欧では sorciere（フランス：魔法使い），strega（イタリア：女放浪者），bruja（スペイン：女占い師，魔法使い），ラテン語系はキリスト教神学者や審問官のフィルターを通して悪のイメージが濃いが，maga（魔法使い），striga（フクロウ），venefica（毒盛り女），malefica（害毒をなす魔女），indivina（女占い師），lamia（女吸血鬼）などである。

元々は南欧ではアルテミス・ダイアナの太母信仰—そこにはデーメーテル，キュベレなどの大地母神を含む—から，北欧ではゲルマン，ケルトの樹木崇拝の土着の神々の信仰に由来する。それは豊饒の神，狩猟の神への信仰で，人間と動物を愛護し，多産と豊作，収穫を祈った。供儀が要求され，聖なる売春が行われることもあった。ローマ帝国とその後の民族大移動に

よって後半に流布し，森や野の女神としてその地の妖精と並んで民衆レベルで受け入れられていった。

魔女信仰は広い意味の魔術の一つの形態であり，幸福や保護，富を与え，復讐をもたらす超自然への信仰であり，秘教的行為・儀式・呪文・護符を伴っていた。それは善い魔術と悪い魔術とが対抗し合いつつ調和する信仰であった。どの民族にも自然の力・超自然的精霊・デーモンを用いる超能力者がいた。シャーマン，ドルイド僧，呪術師，賢い女性，魔法使いなどである。農民達は自然をデーモンと見て，その災いから免れるために呪術に頼った。出産も大地の豊饒と同じように女性の体内からの稔りであり，呪術性を帯びていた。

賢い女性（wicca：witch）は，農民の生活感覚に根づき経験的知をもっており，植物の知識と健康法に詳しく，自然の摂理に基づいて種々の薬を作って治療を行ってきた。薬草に通じ，睡眠薬と媚薬としてのマンドラゴラ，止血剤や子宮の収縮剤となる麦角の効力をよく知っていた。彼女たちが出産に立ち会った後，酒と踊りのお祭り騒ぎが行われた。これが後に嬰児殺しやデーモンへの供儀，大釜を囲んでの魔女の狂乱の集いのイメージとなったのである。ヘカテは女呪術師が魔法をかける時の守護神で，メディアはヘカテから薬草術を習ったとされる。魔力を行使した結果利益をもたらすのが白魔術，不吉や損害をもたらすのが黒魔術として分化していった。

殆どの宗教が魔術的要素を含み，魔術と宗教がオーバーラップしていたが，唯一絶体の神をいだく父権宗教であるユダヤ＝キリスト教は魔術と悪魔を同一視し，神と敵対させて脱魔術化を推進させた。即ち魔女を悪魔の使いとして排除していったのである。しかしキリスト教も初期の段階では土着の呪術と混じり合い共存していた。特にカソリックは聖別式・護符・祈りという形で引き継ぎ，悪魔払いの儀式と秘蹟をたくさん持っていた。伝統的魔術を悪魔のなせる技にして，教会儀式という新しい呪術で対抗しようとしたのである。後にプロテスタントはこのようなカソリックに原理的問いを提起し，どちらも迷信で神への冒瀆であると決めつけ，魔女狩りを激化させることになった。

中世初期までは魔女達は田舎に異教的迷信としてバラバラに存在し，住民達からは頼りにされていた。教会は異教の信仰に対し，世俗権力と協力して教会罪を科してきたが，魔女と妖術の現実性は否認した。しかし中世後期になると，魔女は悪魔の下に組織立てられて存在する真実であるとし，悪魔学によって体系化されていくのである。

900年頃，初めて魔女教書というべき『司教法令』が生まれ，15世紀まで権威を持ち続けた。副題として「司教たちが魔女と呪術師を各教区から駆逐するために」とある。これは4世紀のアウグスチヌスの考えの延長上にあり，呪術による動物への変身がいかに真の信仰にとって邪道であるか説き，それはスコラ学によって悪魔学に整序されていった。そこには〈悪魔との契約〉，〈自由意志〉という観念が導入されていた。さらに10-12世紀に多くの魔女教書が出され，その後一般化した魔女の類型が提示されている。「サタンに帰依し，サタンの作り出す妄想や幻影に誘惑され，動物にまたがり，夥しい群れをなして夜のしじまの中，広大な国々を横切り，ディアナを女主人としてその命令に従い，幾夜も召し出されて彼女に奉仕する。そういう邪悪な女たちが存在する。」そして東方や小アジア由来のディアナ神や，ヘブライのヘロディアス，ゲルマン民話のホルダ，ペルヒト，ベンゾナなど地中海世界の古典的太母神とゲルマンの民間信仰が習合して，〈悪魔に仕える魔女〉としてコード化された。

13世紀に大規模な脱魔術化が始まった。それは異端運動が起こって教会が真正面からそれに取り組み，その闘いの中で，神学者と法学者によって悪魔学が作られ，新しい魔女像が時代を支配していったのである。その像は不思議なことに，原始キリスト教会がギリシャ・ローマ文化の支配的な価値観によって「子供が犠牲にされ，殺されて食われる近親相姦的オルギアだ」と非難された同じやり方を適用して作られたもの

であったという。異端運動は4世紀にフリュギアのモンタニズム派，8世紀にアルメニアのパウリステン派，11世紀にトラキアのボゴミール派に適用され，後にマニ教とグノーシス派の二元論を取り入れてより先鋭化されていった。異端者は悪魔の崇拝者とされ，11世紀にはカタリ派，ヴァルド派，フランチェスコ会の托鉢僧に対して同じ処置がとられた。それはユダヤ人やムーア人，後にはプロテスタント，植民地の原住民に対してもそのまま適用された。14世紀には魔女は異端の烙印を押され，指導者を持ち，誤った教義や儀式，そしてヒエラルキーを持つセクトであるとされ，追求が始まった。異端審問官に教会改革派のドミニコ会士が任命されて異端審問の制度は固まっていった。

神学者が固めた異端が裁判でも有効となったのは15世紀になってからで，妖術を禁じる夥しい大勅書が発布され，特に教皇イノケンティウス8世の『緊急の要望書』(1484年)と，二人のドミニコ会派の異端審問官，インスティトリスとシュプレンガーによる『魔女の鉄槌』(1486年）が出されてからである。後者は教皇にも認証され，出版革命によって広く流布し，17世紀まで31版を数え，魔女裁判のマニュアルとなった。司教法令の段階では，デーモン信仰は妄想・迷信であるとされたのがこの頃転換し，デーモンの実在性が叫ばれ魔女概念が成立した。次に書かれているように，悪魔に奉仕する魔女の実在という観念には甚だしく病的な女性嫌いがあり，悪魔との情交という概念が悪行の核となった。「女はその迷信・情欲・欺瞞・軽佻において男を凌駕し，肉体の力の弱さを悪魔との結託で補って復讐を遂げる。そして妖術にすがって執念深い淫奔な欲情を満足させようとする。サバトを埋め尽くしているのは女たちだ……一人の男の魔術師に対して何百という魔女がいる……」女性は本性上男性より劣り，肉体は常に抑制されない欲望でかき立てられており，たえざる脅威である，秩序形成作用を破壊し，その本質はカオスであり，否定的で不法の存在である，というのである。このようにして，豊饒の女神や賢い女たちは魔女＝悪魔に仕立てられていき，多くの女性が告発され，残酷な拷問を受けて処刑されていった。

このようにして新しい魔女が作られていったが，宗教的な理由の他に次のような原因も挙げられる。1. 気候・経済・社会の大変動による人々の不安がスケープゴートを必要とした。2. 国王の絶対主義体制の確立のために，その正統性の理論とそれを支える司法機構，警察制度を固める必要があった。一般大衆と権力者の双方の必要が一体となって大規模な運動となったのである。貨幣経済が発達して農村や都市の共同体が崩壊し，貧民層が増えてアウトサイダーが生み出されると，民衆は不安や憎しみを社会の周縁部に住む人々をスケープゴートとする事で転化した。国王を支える都市の教会や大学のエリート層もそれを利用して～経済的変容を乗り切り布教活動で罪悪感を植え付けられた中・上層農民を使って，邪魔な古い文化を排除していったのである。

B　魔女狩りと反・魔女狩り

16世紀末から17世紀にかけて，一群のカソリックの法律家たちは『鉄槌』を補強し，魔女裁判の権威を固めた。法律家・経済学者・人文主義者のジャン・ボダンの『魔法使いの悪魔的狂気について』(1580年)，ロレーヌ検事総長のニコラス・レミの『悪魔崇拝』(1595年)，スペインの法律家アンリ・ボゲの『魔女審問』(1602年)，スペインのイエズス会士の法律家マルタン・デル・リオの著作（1599-1600年）が出版され，ピエール・ド・ランクルは1609年ラブール地方で大規模で苛酷な魔女狩りを強行し，ヨーロッパにサバト妄想を広めた。皆，イエズス会士で知性あふれる人文主義者であったそうである。特にジャン・ボダンは『国家論』(1569年)を著してヨーロッパを襲ったインフレの現状と本質を論じ，台頭してきた絶対主義国家の設計図を書いた法律家，社会理論家として名声を持っていただけでなく，宗教的寛容論を説いた啓蒙家として人々の畏敬を集めていたために大きい影響力を持った。彼は旧約聖書に忠実に，そして近代法に見られるように〈悪魔と契約した

魔女の自由意志と責任能力〉を前提とし，社会秩序を脅かす魔女を死刑に追いやった。

このような，アリストテレス主義のスコラ哲学より発展した正統派教会悪魔学に対し，15世紀に，フィレンツェを中心にネオプラトニズムが起こり，『鉄槌』を攻撃し，魔女裁判に懐疑を示した。12世紀以来，十字軍やレコンキスタによってオリエント・アラブの異文化が流入し，エジプト学，ヘルメス思想，カバラ神秘主義，ネオプラトニズムの新異教主義が西欧にルネッサンスの花を開かせた。フィチーノ，パラケルスス，ジョルダーノ・ブルーノ，後にアグリッパ，ジョン・ディーらは，数学に基づく新しい科学への道を開き，自然の魔術と自然の概念を強調した。占星術や錬金術に関心を持ち，デーモンを呼びだした。彼らにとって自然は霊に満ち，共感と反発によって作用する魔術的な力に満たされていたのである。存在の連鎖を上昇することで人は神に到達できるとする考えは，被造物崇拝や多神教につながるとして，教会によって異端として危険視された。彼らは新興商人や宮廷サークルの知識人を後援者とし，教会＝大学の管理体制からはずれ，放浪の知識人として遍歴を重ねた。

パラケルススはガレノス以来の公認医学の枠を飛び出して占星術と医学を結びつけ，原典としてのアリストテレス医学を再評価し，北方ケルトの呪医を掘り起こした。アグリッパも同様で，彼らの思想の基底の一つに女性崇拝があり，ケルト文化の女呪医に知の源泉を求めた。魔女と見なされている薬草摘みの女に感動し，それをもとに薬学を考えた。アグリッパはパリ大学からは異端と宣言され，ボダンによって稀代の黒魔術師と決めつけられ嫌われた。アグリッパの考えは，エリザベス朝ルネッサンスの指導者，ジョン＝ディーに引き継がれた。ディーは女王の寵愛を受け，シドニーやセシルなどの有力な人物のサークルの中心人物として大きい影響を与えた。フランセス・イエイツが明らかにしたように，シェイクスピアの作品にも反映している。しかしジェームズ一世には嫌われ，晩年は不遇のうちに死んでいった。

魔女裁判への懐疑は，経験的観察に支えられた医学論の出現によって次第に知識人の間の趨勢となっていった。オランダ人ヴァイアーはアグリッパの弟子であり，魔女の実在は認めるが，彼女たちには責任能力がなく，自ら意識しないまま悪魔にだまされた犠牲者であるとした。ボダンから反撃された『悪魔の幻惑』(1562年)で，医師の立場から，魔女は憂鬱症だから病院が必要であると説いた。ヴァイアーの影響を受けたイギリス人のレジナルド・スコットは実在性をも否認した。『妖術の暴露』(1584年)はボダンへの反論で，嵐や病気は自然現象かさもなくば神による罰として送られたものであり，魔女が神と同じ力を持つと考えるのは神を低く評価するものである，と述べた。彼の本は1603年ジェームズ一世によって禁書となり，ジェームズ一世は彼を批判して『悪魔学』(1597年)を書いたのである。

魔女狩りが異端狩りと分かれて一人歩きを始め，宗教改革が進んでいくと，プロテスタントの勢力圏でも同じような残酷な地獄絵図が展開された。カソリックは魔法に対して対抗魔術で対応したのに対し，一切の呪術的なものの根絶を目指したプロテスタントの方がより厳しかった。聖書の原典の忠実な解釈に戻ったため，「魔女は生かしておいてはならない」という旧約聖書の出エジプト記22の18を拠り所にして迫害はより徹底していた。ルターにとって悪魔とは，信仰の人と罪の人とを区別するために神が定めたもうたもの，罪を犯すか，神の意に添った行動をするかの選択は自由意志が決定する。これは魔女になるのは本人の自由によるという論理で，それだけに魔女に対して容赦なく，厳しい弾圧が行われた。そしてカトリックの再征服による大迫害も起きた。

このように，ルネッサンス期には，中世スコラ哲学以来の正統派教会悪魔学とネオプラトニズムの新異教主義，宗教改革派と反宗教改革派のように，互いに敵対して相手を悪魔と見て戦う中，魔女狩りは猖獗を極めたのである。

C　イギリスの魔女狩り

イギリスは大陸の影響を受けつつも事情が違っていた。イギリスでは異端審問がなく，殆どが民事犯罪であった。法体系もローマのカノン法を継受せず，土着の普通法を育て上げたために拷問制度も受け付けなかった。民間伝承の悪行が殆どで，人や家畜を殺したり，作物に被害を与えるようなことで，サバトも悪魔崇拝も稀であった。ウェールズとアイルランドでは殆どなく，カトリックの多い後者では処刑されたのは10名以下であった。スコットランドはカルビニズムに基づく長老派の教会組織が作られて宗教改革が徹底して行われたため，4千人以上が処刑され，拷問も残酷さもドイツに匹敵すると言われている。イングランドでは1563-1603年に50人，1603-18年に40-50人，1640-47年の内乱期には300人が処刑され，特にエセックス州に多い。

7世紀に，処罰しうるものとされて教会法で吟味され，世俗法で処罰された。公に成文化された妖術禁止法は1542年，1563年，1604年の3回発布された。1542年にヘンリー8世が発布した法では，妖術を行ったものは全て死刑，財産没収された。悪霊を呼び起こすことから，宝の在処を占ったり，盗品を捜しあてたり，人を殺したり肉体的危害を加えたり，家畜などの財産を害したり，道ならぬ恋を成就させたり，十字架を壊したりするまですべてを対象とした。しかし実際に適用されたのは1名のみでそれも無実の故に釈放され，有名無実の法に過ぎなかった。

法として有効であったのは1563年エリザベス一世が罰則を緩和して発布したものからであった。女王は乗り気でなかったが，教会からの圧力でやむを得ず実施したと言われる。初犯はすべて1年の刑，再犯になって終身刑か死刑になった。その他も懲役1年やさらし台に立たされて公衆の面前で罪を告白するという罰に軽減されたり，妻子の相続財産が没収から除外されたりした。1566年に初めての処刑者を出して以来，これによって魔女弾劾が続いた。しかし拷問は許されず，魔女であるが故でなく，具体的に危害を及ぼすことによってのみ処罰された。女王はルネッサンス人文主義を身につけ，ネオプラトニズムの異教主義に心を引かれ，反・魔女狩りの主導者ディーを重んじた。狩猟の女神ディアナがディアナ女神としてそのまま持ち込まれ，自然・月・女王を象徴する信仰として民衆の間に広まった。女王の宮廷祭儀にもディアナ崇拝が取り入れられ，キリスト教によって異端の魔女とされたのとは全く無縁に，ギリシャ・ローマの純粋なディアナ崇拝が宮廷を中心に多くの信者をもった。ジョルダーノ・ブルーノがロンドンに来て，ディアナ崇拝の熱狂的な信者になり，やがてイタリアで捕らえられ異端審問にかけられ，8年の獄中生活後，ローマで火刑に処せられたという。*A Midsummer-night's Dream* にこのディアナ信仰が伺える。

イギリスでは「魔女はステュアートと共に来て，ステュアートと共に去った」と言われるように，1603年女王の死後，スコットランドからやってきてステュアート朝を開いたジェームズ一世から本格的な魔女狩りが始まった。彼は，1597年にスコットランドで出版した『悪魔学』をイングランドで再び発行し，魔女懐疑論者のスコットの著書を燃やすように命じた。そして1604年に法を改定し，「魔法・魔女及び悪霊との交わりを禁止する法律」を制定し，刑を一層厳しくした。初犯でも死刑，悪霊を呼んだり力を借りると極刑となった。しかし処刑は22年間で40人で，むしろ一般大衆の魔女ヒステリーを抑えて，捕らえられた者を放免したり不正な告発を暴いたという。『悪魔学』は大陸の悪魔学者のことばを繰り返すだけであったらしいが，悪魔の実在性，その習性や能力をつぶさに描き出した。魔女の悪魔崇拝，悪魔との契約，サバト，夜間飛行，毒薬や呪いによって人々を狂気，性的不能，性的昂進，疫病に追いやり，果ては殺害する事など。彼の規定する魔女とは，「使い魔と謀る者」であり，また，嵐を起こす力，蠟人形を燃やして病気や死を招く力があること，ディアナと森の宮廷の従者であること，悪魔は犬，猫，猿などの動物の姿で現れ，いつも人を欺く手口を考え出すということ，魔女を捜す方法と

して「浮遊」が有効，女は生来弱く，悪に傾きやすいから魔女は男より女が多い，という見方を支持した。彼はカルヴァンの予定説を主な論拠とした。人間は神の似姿に作られたが，原罪によってそれを失ってしまった。神は選ばれた者たちをその似姿に戻したがそれ以外の人類は全て敵である悪魔の手に渡され，悪魔の似姿になって最大の不敬虔たる悪魔の礼拝を喜ぶようになった，というものである。

彼は1566年出生後8ヶ月で父ダーンリー卿が謀殺され，それに関与していた母メアリーは逮捕，廃位に追い込まれてイングランドに亡命し，両親を知らないまま1歳で王位継承した。カソリックとプロテスタントに始まる貴族間の激しい対立が続き，摂政も次々殺されるという不安定な環境で，1583年自ら親政に乗り出す。プロテスタント長老派の牧師たちは妖術禁止法を厳しく適用するよう要求し，王は魔女狩りを容認した。そして王権神授説を掲げ，絶対王政の実を挙げて教会の国政への干渉や介入を排除することにも成功した。密かにロバート・セシルの謀らいでイングランド王位継承の話が進められ，1587年母メアリーの処刑にも抗議書を送るのみであった。1603年，女王の死後，イングランドの国王を兼ねることになったが，国民からは異国人扱いで，障害に突き当たることが多く，事件が相次いだ。王位簒奪を謀ったコバム卿のMain Plot，カソリック容認を求めるBye Plotなど。そして宮殿会議では，国教会の立場を貫き，カソリックとピューリタンの両極を排除する旨を宣言して，1605年にはカソリックへの弾圧を恐れるガイ・フォークスを首謀者とするGun Powder Plotが起きている。*Macbeth*は1606年に書かれ，この事件に参画した廉で捕らえられたガーネット神父の裁判における「二枚舌」論法が門番の台詞に反映している，と多くの人が指摘している。

ジェームズ一世は，王権神授説を主張し自身の王権の絶対化をはかることによって統治の困難に対抗しなければならなかった。悪魔学の著書や聖書注解を著し，欽定訳聖書（1611年）や，自らの『作品集』（1616年）を出版したり，神によって王権を授けられた賢人君主としての姿を国民に示そうとした。宮廷演劇こそ地上における神の代理人たる自身の姿を呈示するのにふさわしい舞台として，演劇も手厚く庇護されたのである。彼には女性嫌悪，女性恐怖が根強くあるといわれるが，それは母メアリーやエリザベス女王に運命を翻弄されたせいもあり，アン王妃は浪費家で一観劇，大旅行，建築好きで，莫大な負債を残す一，カソリックに改宗したりして夫婦仲が悪く，ヴィリアーズとの男色の噂もあった。

イギリスで例外的に苛酷な魔女狩りを行ったのは，ピューリタン革命期のマシュー・ホプキンズであった。約300名を処刑し，イングランドの魔女中三分の一が彼の成果に帰した。発見の手口は悪魔の印を針で刺すほか，眠らせず，座らせず，自白するまで部屋の中を歩かせて，意識を朦朧とさせて自白に追い込んだという。眠りを失って妄想を見るマクベス夫妻と共通するものがある。

シェイクスピアは反・魔女狩り的立場をとるエリザベス一世と，魔女狩りを進めるジェームズ一世の両極の君主に仕え，魔女の様々の面を描いている。*Macbeth*の他，*Henry VI*ではジャンヌ・ダルクが法で禁止されている悪霊召喚をする新しい魔女として描かれ，太母神ディアナの信仰の地であるエフェソスは*Comedy of Errors*で不思議な魔法に満ちた空間として用いられた。*A Midsummer-night's Dream*では月の女神ディアナが支配する夜の森で愛の魔法がかけられ，*The Tempest*では原住民の黒魔術の魔女シコラックスを懲らしめ，白魔術で精霊を操るジョン・ディー的なプロスペローが描かれている。

結　　論

魔女狩りの歴史の中に*Macbeth*を置いてみると，それぞれがよく見えてくる。魔女狩りは古い母権的異教の要素を抑圧し排除しながら行われていった。ルネッサンス期には中世正統派と異教主義，近代科学主義，カソリックとプロ

テスタントが複雑に錯綜し，権力をめぐる熾烈な争いの中猖獗を極め，その中で *Macbth* が上演された。ここには時の権力者ジェームズ一世の意図が明確に見えると同時に，その矛盾も示された。悪魔であるべき魔女たちは，自在に心の無意識の層に入り込みドラマ全体を支配する。そして人間の奥底の願望を解放して導く，善も悪も兼ね備える両義的な神話や民話の神々のパワーを持っている。弱さにつけ込まれ魔女にたぶらかされ，自らも魔女となるマクベス夫妻はむしろ観客の同情を得る。マクベスの豊かな想像力がリアルな心の真実を描き，夫人が二重に自分を殺すことに恐れと哀れみを覚える。そしてそのような者に支えられながら，彼らを悪魔として排除していく正統な王権継承者の矛盾，不自然さも見えてくる。この作品には公の権力の正統さと同時にその抑圧のからくり，抑圧されたものの価値もが示され，魔女狩りの本質を凝縮して見ることができるのである。

注

1. 石原孝哉『シェイクスピアと超自然』南雲堂 1991, 67 頁。
2. William Shakespeare, *Macbeth*, New Arden Edition. 以下，本文の引用はこの版による。
3. 上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』人文書院 1993, 69-71 頁。
4. アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館。
5. ローズマリ・エレン・グィリー『魔女の事典』原書房。
6. Terry Eagleton, *William Shakespeare*, Basil Blackwell, 1986.
7. 安田喜憲『蛇と十字架—東西の風土と宗教』人文書院 1994。同『森と文明の物語』筑摩書房参考。
8. 魔女狩りの歴史を書くに当たって主に次の本を参考にした。

上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考—』人文書院 1993。
上山安敏・牟田和男編著『魔女狩りと悪魔学』人文書院 1997。
池上俊一『魔女と聖女—ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社 1992。
浜林正夫『魔女の社会史』未来社 1978。
高橋義人『魔女とヨーロッパ』岩波書店 1995。
岩崎宗治「『マクベス』—魔女と宗教改革（1）（2）」『英語青年』8, 9 月号（1993）。
石原孝哉『シェイクスピアと超自然』 南雲堂 1991。
船戸英夫『一角獣・不死鳥・魔女』弓書房 1980。
小林章夫『イギリス王室物語』講談社 1996。
森　　護『英国王室史話』大修館 1986。
カルロ・ギンズブルグ　竹山博英訳『闇の歴史—サバトの解読』せりか書房 1992。
ローズマリ・エレン・グィリー荒木正純，松田英監訳『魔女の事典』原書房 1996。
B. エーレンライク，D. イングリシュ　長瀬久子訳『魔女・産婆・看護婦：女性医療家の歴史』法政大学出版局 1996。
Frances A. Yates, *The Occult Philosophy in the Elizabethan Age*, Routledge & Kegan Paul, 1979.
Peter J. French, *John Dee : The World of an Elizabethan Magus*, Routledge & Kegan Paul, 1972.